二〇一八年度 置賜地区高校生

「地域と私たちの未来を考える」小論文コンテスト

優秀小論文 二〇一八テーマ「郷土の未来と私の生き方を考える」 集

はじめに

にとっては、今まさに地域に育つ当事者として、この地域の未来を見つめ、自分の将来の生き方を考 れます。様々な要因の一つに、高校生が進学・就職で県外に出て戻ってくる人が少ない「若者流出 えることは、どのような進路に進むにしても大事なことです。 があげられています。地域と私たちの未来はどうなるのか、二年後に進学・就職を迎える高校二年生 少子高齢化と共に近年日本の人口が減少する中、私たちの住む置賜地域も人口が確実に減少してい このまま推移すれば、地域を支える人材や働き手が不足するだけでなく、「地方消滅」さえ懸念さ

導いただいた先生方に心から御礼申し上げます。応募総数は九十三点あり、初めてにしては期待以上 を託するに足る、しかも熱い思いが伝わる優れた小論文も見受けられ、この企画の意義が感じられま の参加者に大変喜んでおります。小論文を読みますと、趣旨をしっかりと受け止め、 小論文コンテスト」を高校二年生を対象に実施いたしました。応募された生徒の皆さん、そしてご指 このような趣旨から、米沢有為会は今年度初めて、「置賜地区高校生『地域と私たちの未来を考える』 置賜地方の未来

広くお読みいただき、地域の未来を共に考えていきたいと思います。 この小冊子は、審査の結果、受賞された最優秀賞一点、優秀賞四点、 入選五点を収録したものです。

平成三十年十月二十八日

高校生小論文コンテスト実行委員会

受 賞 者 覧

◇最優秀賞(一点)

◇優秀賞 (四点)

米沢商工会議所会頭賞

学園都市推進協議会会長賞

公益財団法人近野教育振興会理事長賞

米沢信用金庫理事長賞

◇ 入

選

山形県立小国高等学校

彩

希

遠 藤

応募総数

九十三点)

二年

二年 永 井

珠

二年

鈴

木

理 莉

二年 年 渡 斎 部 莉 瑚 子

山形県立高畠高等学校

山形県立高畠高等学校 米沢中央高等学校 山形県立小国高等学校

山形県立小国高等学校 山形県立小国高等学校 年

二年 舟

ひろみ

二年 津 Ш 優 有

年

Ш

遥 都 奈

平 雄 大

山形県立南陽高等学校 山形県立米沢東高等学校 山形県立長井高等学校

平成三十年十月二十八日

※ホームページには最優秀賞一点と優秀賞四点の小論文を紹介します。 公益社団法人 米沢有為会 高校生小論文コンテスト実行委員会

郷土の未来と私の生き方を考える

形県立小国高等学校

Ш

藤 彩 希

活気溢れる地域にできるだろうか。 口減少が進んでいる。どうすれば人口減少をくい止め、 置賜地区では少子高齢化と若者流出によって人

力が是非必要である。高校生である私達もその一翼を扣 業が必要だろう。これらの活動をしていくには、若者の るような観光スポットや旅館、外国企業と連携できる企 人の観光客も増えていく。地方でも、外国人が来てくれ と思うからだ。例えば、東京オリンピックの影響で外国 帰ってくることで新しい仕事が創造できるのではないか 持ち帰ってくれることが地域の発展につながると考える。 へ出て蓄えた知識や、多くの人と触れ合って得た考えを のは仕方のないことなのかもしれない。しかし、私は外 なぜなら、よそで学んだ若者が新しいアイデアを持ち 確かに、若者が将来のために進学等で外へ出てしまう

うことができるはずだ。

課題や、「高校生の力で閉まってしまったお店を復活さ 力や課題、守りたいものや生み出したいものを話し合っ り、自分に何ができるかを共に考えた。やはり地方では、 達は、小さな学校や自分の住む地域に夢や誇りを持ちた だろうと考え、この八月二日に小国町小玉川で、「全国 せたい」といった意見が出された。 た。その中では、「お店や遊ぶ場所が少ない」といった かった。グループワークの中では、それぞれの地域の魅 ていて、「小国町だけの問題ではない」ということが分 少子高齢化が進んでいたり、生徒数が百人を切ったりし 人口減少や学校の生徒数減少に悩む全国の高校生が集ま いと思い、このサミットを企画した。ここには、地域 小規模校サミット」というプロジェクトを開催した。私 では、私達小国高生はこの地域のために何ができるの

くさんの魅力があると自信を持つことができた。やはり、 中で、私の町は羨ましいと思ってくれる人がいる位、 外に出ると考えていた。だが、多くの仲間と話していく ミットを行う前は、遊ぶ場所も働く場所もないから、町 分の地域が素晴らしい場所だと感じられたことだ。サ する事で新しい考えを持つことができたこと、改めて自 サミットから私が得たことは、多くの人と意見を交換

優秀賞

と多くの方が興味を持って来てくれるようにしたいと 声をかけてくれた。私ばこのような活動を続けて、もっ 大人の方々に紹介できた。多くの方が、「良い町だ。」と 生や大人の方々に紹介できた。多くの方が、「良い町だ。」 生や大人の方々に紹介できた。多くの方が、「良い町だ。」 生や大人の方々に紹介できた。多くの方が、「良い町だ。」 と変かけてくれた。私が地域のためにできることは、地域 いと強く感じた。私が地域のためにできることは、地域 いと強く感じた。私が地域のためにできることは、地域 いと強く感じた。私が地域のためにできることは、地域 いと強くの方が興味を持って来てくれるようにしたいと

かにできるように考えて生活していきたいと強く決意しれるのではないだろうか。私は今よりも更に、地元を豊の地域と比較して考えるべきだと思う。少しでもアイデの地域に何が足りないのか、何を残していくべきかを他の地域に何が足りないのか、何を残していくべきかを他の地域に何が足りないのか、何を残していくべきかを他の地域に何が足りないのか、何を残していくべきかを他の地域に何が足りないのか、何を残していきたいと強く決意した。これから進学や就職で町外、県外へ出る人は、自分と、関わり話すことで、悩みや解決策が明確になってきさん関わり話すことで、悩みや解決策が明確になってき

米沢商工会議所会頭賞

郷土の未来と私の生き方を考える

山形県立小国高等学校 二:

永 井 珠 莉

少人数で活動している。人。こうした状況下で私達小国高校生は八十一人という人。こうした状況下で私達小国高校生は八十一人という、、私達なりの地域貢献のやり方である。「全国高等学校小規模校サミット」これが私達の考え

自然がとても豊かできれいな町なのだ。町には「白い森小国」というキャッチフレーズがあり、い自然を壊してまで活性化をして欲しくはない。小国が活性化していないからだと思う。だからと言って、美名前が変わるのは悲しい。町から人が出て行くのは地域減も懸念されている。自分の生まれ育ってきた町が消え、減も懸念されている。自分の生まれ育ってきた町が消え、近年、少子高齢化と共に日本の人口が減少し、地方消

我が校のような小規模校は、未来の日本を先取りして

全国の小規模校の仲間が集まり話し合えば、

- 4 -

いように、全校生を含めたファシリテーター研修も三回バーとなり、準備をした。来てくれる高校生達が話し易模高校約三百校に送った。迎える側として私もコアメンの趣旨を手書きの手紙にし、全国の百五十名以下の小規模校サミット」を開催することにした。まず、サミットへの解決策が生まれるのではないかと思い、「全国小規への解決策が生まれるのではないかと思い、「全国小規

ワークショップでは、各地域の魅力、 寄付をした学校。防災訓練に力を入れて取り組む学校等 に高校で缶バッチを作り、売り上げで町にバスを購入し 業をしている学校。震災で大変な被害を受けた町 生徒が全体の司会進行、グループワークの進行をした。 がとてもきれ 自分の地域について改めて気づくことがあった。「自然 遊ぶ場所がない等があげられた。生み出したいもの、守 自然がきれい等の意見が出た。課題では、若者がいない、 いもの、守りたいものについて話し合った。魅力では、 があり、そんな活動がある、できる、と視野が広がった。 初めに、各高校の取り組みを紹介してもらった。遠隔授 たいものでは、アスレチック、地元のお店等があった。 サミット本番、全国各地から十七校が来て下さっ 方々や高校生と話すことで、様々な現状を知り、 いだね。」等と褒められた時は、とても嬉 課題、 生み出した 0 ため た。

その人達とは今もSNSで繋がっている。しかった。この交流を通し、全国各地に友達ができた。

きた。他地域の人に自分の町を見てもらうことで、新し よ。小国町に行ってみたい。」等多くのコメントを下さ た自分の町が、実はいい所なのでは?と気づくことがで り、とても嬉しかったし、自分の行ってきた活動に自信 た。」とあり、とても嬉しかった。 で「永井さんの手書きの手紙に心が打たれ、 を知りたいと思うようになった。サミットのアンケート い気づきがあることもわかった。また、もっと町のこと が持てた。サミットを開き、何もない田舎だと思ってい れた方々が「すごいね。頑張っているね。」「応援してる 小国町についてのブースを作. イオン(ボランティアアワード」に参加し、 八月二十~二十一日には東京で行われた「風に立 り、発表をした。聞い サミットと 参加、 しまし 一つラ

またい。そして、小国町をより良い町にしていきたいと来たい。そして、小国町をより良い町にしていきたいとことを学び、多くの知識を身につけて、小国町に戻ってか考え、行動したいと思う。将来は、町外でたくさんのた。そんな地元のため、町のために私には何ができるの達は地域の方に支えられて生活できているのだと痛感し達は地域の方には町の多くの方々が協力して下さった。私

学園都市推進協議会会長賞

郷土の未来を考える

米沢中央高等学校 1

木愛理

少子高齢化が進む中で、私たちが住んでいる置賜地区の人口も確実に減ってきています。置賜地区では、高校の人口も確実に減ってきています。この問題を解決するためにえる世代が減少しています。この問題を解決するためにえる世代が減少しています。この問題を解決するためにえる世代が減少しています。この問題を解決するために、高校や大学を卒業した若者が戻ってきたくなるような、そして幅広い世代の人々が支えあい助けあえる地域の人口も確実に減ってきています。置賜地区でよりが必要だと思います。

だから、県外の大学へ行き、たくさんの経験をすること内の高校生も同じように考えている人も多いと思います。用内の大学では取れない資格が取れる大学があることを県内の大学では取れない資格が取れる大学があることを県内の大学では取れない資格が取れる大学があることを県内の大学では取れない資格が取れる大学について調べはじめ、私の将来の夢はまだはっきりは決まっていませんが、私の将来の夢はまだはっきりは決まっていませんが、

なくなってしまいます。 増えていく高齢者を支えることができず社会が成り立たます。このままでは、若者の数がどんどん減少し、年々を迎えた若者が県外に就職しているということだと思い三歳の県外転出者が非常に多いです。つまり、大学卒業はその後のことだと思います。山形県では、二十二、二十は良いことだと思います。しかし、問題となっているの

そういった経験をすることで地域のことをよく知り、好 と交流する機会がたくさんありました。そのことで地域 だいたり、さまざまな行事に参加したりと、 学校では、地域の方々に伝統の遊びや料理を教えていた たら、山形に戻ってきて働きたいと思っています。 もらうことが重要だと思います。私は、大学を卒業し い。地域に貢献したい。」という気持ちを若者に持って きます。そのためには「自分の育った場所で仕事がした きになり、「この地域にずっと居たいな」と思うのでは の方々の温かさを知りました。小中学生ぐらいの時 域の方々のおかげだと思っています。私が通っていた小 分の育った町が好きだからです。今、そう思えるのも地 でお世話になった地域をもっと豊かな所にしたいし、自 若者にどうやって県内に残ってもらうかがカギになって この問題を改善するためには、高校や大学を卒業 地域 今ま 心した の方

公益財団法人近野教育振興会理事長賞

地域の未来と私たちの未来を考える

形県立高畠高等学校 二左

Щ

斎 藤 架

子

体の四割に上る。地域を支える人材や働き手が不足して をオープンした。このような試みをそれぞれの市町村で を活性化し、少しでも多くの人が米沢に足を運んでく 賜地区全体でも十年ごとに人口が三万人ずつ減ってい 計人口は、今後三十年間で半分以下に激減している。置 ことが増えた。資料を見ると、置賜地区の三町の将来推 やっていかないと、どんどん地域の活力が減少してい れるようにと、 域消滅の可能生もある。私の住んでいる米沢市では地域 いくことによって地域が衰退していき、このままでは地 の四分の三は県外に出ている。就職の人とあわせると全 高校卒業者の県外への就職・進学状況を見ても、 ニュース等で「人口減少社会」という言葉を見かける その理由の一つは、県外に出て行く人が多いことだ。 現在の六割くらいの人口規模になると推計されてい 高速道路の開通に併せて今年から道の駅

の経験が将来、就職を考える上で山形県を選ぶきっかけとって地域を知る良い機会になると思います。そしてそとの交流をもっと増やしていくべきだと思います。そうとの交流をもっと増やしていくべきだと思います。そうれています。私は、それに付け加えて、小中学校と地域れています。私は、それに付け加えて、小中学校と地域れています。私は、それに付け加えて、小中学校と地域れています。山形県では、大学と県内の市町ないかと私は思います。山形県では、大学と県内の市町

張っていきたいです。 に暮らせる地域づくりをする一員として、これからも頑子どもからお年寄りまで、すべての人が支えあって元気子どもからお年寄りまで、すべての人が支えあって元気たして、子どもたちに地域の良さを伝えていきたいです。大学を卒業して置賜地区に就職することだと思います。これからの置賜地区のために私ができることは、まず になるのではないかと思います。



てしまう。

理由だろう。

理由だろう。

理由だろう。

理由だろう。

理由だろう。

理由だろう。

いる。

いうのが私の夢だ。その一方で、私には、今の家を建ていうのが私の夢だ。その一方で、私には、今の家を建ている。今、自然に恵まれた地で子育てをしたいといっている。今、自然に恵まれた地で子育てをしたいといっている。今、自然に恵まれた地で子育てをしたいといっている。今、自然に恵まれた地で子育てをしたいといっている。今、自然に恵まれた地で子育てをしたいといっている。今、自然に恵まれた地で子育てをしたいといっている。今、自然に恵まれた地で子育てをしたいといっている。今、自然に恵まであり続けてほしいと思かして、世界の困っている人を一人でも多く助けたいと思めて、世界の困っている人を一人でも多く助けたいと思めて、世界の困っている人を一人でも多く助けたいと思いる。大学卒業後は海外での大学に進学しようと思っている。大学卒業後は海外での大学に進学しようと思っている。大学卒業後は海外であり、私には、今の家を建ているの仕事につきたいと思っている。

のような存在になって地域と関わっていきたいと思って換留学を実施したりして、世界と山形とをつなぐ架け橋という目標がある。地元に戻ってきたら、私は若者の交直して、父と母、自分の夫と子どもたちと一緒に暮らす

を作らないという人の考えを変えることができるかもしたいると言いない。それな状況に対し、私は、ヤングオールドを増やため、定年退職後も雇用の機会を増やし、高齢者も積すため、定年退職後も雇用の機会を増やし、高齢者も積すため、定年退職後も雇用の機会を増やし、高齢者も積すため、定年退職後も雇用の機会を増やし、高齢者も積すため、定年退職後も雇用の機会を増やし、高齢者も積すため、定年退職後も雇用の機会を増やし、高齢者も積すため、定年退職後も雇用の機会を増やし、高齢者も積すため、定年退職後も雇用の機会を増やし、高齢者も積すため、定年退職後も雇用の機会を増やしていると言人口も減少している。若れに加え、日本は今、超高齢社会に突入している。それに加え、日本は今、超高齢社会に突入している。それに加え、

地方のこれから

形県立高畠高等学校 二

部莉瑚

えられる。県外に出て帰ってこない理由は、 が学科や業種が多様であり、 業後県外に進学・就職し戻ってこない「若者流出 ることが予想されている。この原因の一つに高校生が卒 町村別の将来人口推計」を見ると、 目にするようになった。 が得やすいからだ。 一五年から二〇四五年までに三十八パーセント 「人口減少」という言葉をニュ 資料1「山形県及び置賜 また情報が速く、 置賜地区 ースや新聞 都市部の方 一の人口は二 最新 郊区市 でよく がの情 が考

工芸品「笹野一刀彫り」は後継者不足が深刻になってい不参加の部落も増えてきた。また、米沢市に伝わる伝統かし最近では選手として出場できる人が少なくなって、いる地区では毎年部落対抗の運動会が行われている。し活や伝統や文化が消滅することにも繋がる。私の住んで活や伝統や文化が消滅することにも繋がる。私の住んで

[各地で起こっている。。このような後継者不足の問題は米沢市だけでなく全

代の意識を変えていく必要があると思う。今、自分たち 代の心を受け継ぐことであり、その責任が私たちにはあ とが重要だ。地域の生活や文化を受け継ぐことは上 に受け継がれてきたものである。次の世代を作ってい が暮らしている地域の生活は、ずっと上の世代から大切 には地域 る人に移住してきてもらうのも有効だと思う。そのため を活性化する一つの手段である。また、県外に住んでい んだことや習得した技術を持ち帰って活かすのも、 ると思う。例えば、一度県外の学校へ進学し、そこで学 のは、私たち自身であるという意識をもっと強く持つこ りに人が集中し、地方は過疎化が進む現状に日本はある。 る割合はおおむね二十パーセント以下である。それ マ、ニューヨークの人口がそれぞれの国 地方の衰退ひいては消滅を防ぐために、私は私たち世 東京は二十八パーセントとなっている。首都圏ば 連の都市人口統計によると、パ の魅力をもっと全国に発信しなけれ リ、 の総人口に占め ロンドン、 ばならな 一の世 口

いと考えている。そのためにはもっと自分の町につい私は将来役場職員になって魅力あふれる町づくりをし

る一つの方法だと思う。
は、知る必要がある。風土や歴史、文化など実際に住て深く知る必要がある。風土や歴史、文化など実際に住て深く知る必要がある。風土や歴史、文化など実際に住て深く知る必要がある。風土や歴史、文化など実際に住て深く知る必要がある。風土や歴史、文化など実際に住て深く知る必要がある。風土や歴史、文化など実際に住て深く知る必要がある。風土や歴史、文化など実際に住

とを知ることから始めたい。 次の世代を背負う一人になるために、まずは地域のこ







番子 **性** 清 逐

貴重な視点をもつものだけに、審査に際して、それらの中から優秀作品をあえて選び出す難しさを実感 た小論文には、 応募された高校二年生の皆さんの様々な思いが込められており、 それぞれ

受けながら、共同の方向性を模索して進んで行くことが必要です。審査に当たっては、以上の認識を基 られているか、を主に判断させてもらうことにしました。小論文としては、起承転結を明確にしたもの り易く、端的に引用することも重要です。 であることが求められます。論じようとしている主題を冒頭で明確にすることから、始まります。 本にしながら、それぞれの作品が、うまく小論文として構成されているか、うまく主張が読み手に伝え 重要なことと指摘されています。様々な視点から意見を出し合い、互いの意見を尊重し合って、触発を たいという考えが示されています。現代社会においては「価値の多様性」をお互い尊重し合うことが、 小論文を読むと、急速に進行する少子・高齢化社会にあって、様々な形で、 考察の際に引用する資料類は、読み手があるいは参照していないかもしれないという前提で、分か .の緻密さ、具体性を持って、一方、論者の実体験を盛り込みながら、論を進めることになるでしょ 地域の発展を担ってい き

今後の人生に生かしていただくことを期待します。 ように郷土の若人が意欲的に考えて生きていることに、大変に頼もしく思いました。まずは、審査の結 皆さんの作品は、いずれも前向きに地域の未来と自らの生き方についての思いを表現しており、この 皆さんが小 一論文をまとめる際に認識された郷土・置賜への思いをこれからも着実に育て、

置 賜地区高校生 「地域と私たちの未来を考える」小論文コンテスト

旨 くる人が少ない「若者流出」があげられています。地域と私たちの未来はどうなるのか、二方消滅」さえ懸念されます。様々な要因の一つに、高校生が進学・就職で県外に出て戻って少しています。このまま推移すれば、地域を支える人材や働き手が不足するだけでなく、「地少子高齢化と共に近年日本の人口が減少する中、私たちの住む置賜地域も人口が確実に減 項

ことです。本コンテストは高校生の皆さんが地域と自分の未来を考える契機になることを願 い実施するものです。 未来を見つめ、 年後に進学・就職を迎える皆さんにとって、今まさに地域に育つ当事者として、この地域の 自分の将来の生き方を考えることは、 どのような進路に進むにしても大事な

テー 郷土の未来と私の生き方を考える」

募集小論文 募集要項の資料編を参考にして、テーマについての各自の考えを一二〇〇~一四〇〇字にま 置賜地区高等学校二年生

各学校から主催者への提出締切 各高等学校の担当者まで

とめてください。

十月下 最優秀賞一点 旬の予定 | ホテルモントビュー米沢(米沢市門-|優秀賞四点 入選五点 及び副賞 |岩への提出締切 九月十日(月)必着

十九八七六五

式彰

米沢有為会会長 大滝則忠 (元国立国会図書館長)

公益社団法人米沢有為会 八新聞社 発協議会 置賜地区高等学校長会 学園都市推進協議会 米沢商工会議

公益財団法人近野教育振興会

N C V

米沢信用 所

金庫米沢・

置賜経済人クラブ

主催・共催 審查委員長

- 12 -

置賜地区髙校生「地域と私たちの未来を考える」小論文コンテスト 資 料 編

はじめに、山形県及び置賜地区の人口の動きを、30年の長期的スパン(資料1)と、2016年時点(資料2)の二つの視点から見てみましょう。

資料1 山形県及び置賜地区市町別の将来推計人口(10年毎)

1 = 1.00 \$1054 = 1.00 1.00 1.00 1.00 1.00 1.00 1.00 1.					
西暦	2015	2025	2035	2045	人口変化率
					' 15~' 45 (%)
山形県	1123891	1015910	897075	768490	-31.6
米沢市	85953	77483	67817	57720	-32. 8
長井市	27757	23918	20160	16377	-41.0
南陽市	32285	29017	25494	21762	-32. 6
高畠町	23882	21131	18214	15115	-36. 7
川西町	15751	12783	10148	7655	-51.4
小国町	7868	6059	4517	3220	-59.0
白鷹町	14175	11918	9839	7797	-45. 0
飯豊町	7304	5956	4755	3620	-50. 4
置賜	214975	188265	160944	133266	-38.0

<出典 国立社会保障・人口問題研究所>

置賜地区では、2045年の人口が2015年と比較して38.0%減少します。

資料 2 山形県の年齢別移動者の状況 < 2016 年(平成 28 年)山形県の人口と世帯数から> ○表 1 全年齢層の県外転入・転出者数 (人)

	県外転入〔a〕		県外転	出 (b)	転出超過〔a-b〕		
平成28年	14, 869	(△115)	18, 415	(△415)	△3, 546	(△300)	

※()は対前年増減を表す。△表示はマイナス。

「県外転入」は県外からの転入を、「県外転出」は県外への転出を表している。 2016年の本県の県外転入、転出状況は、3.546人の転出超過になっています。

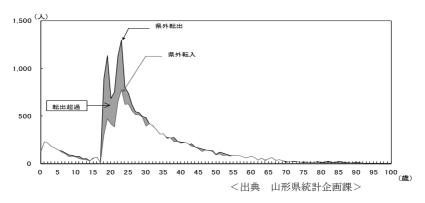
○表 2 若年層の県外転入・転出者数

- /	1	1
(Λ)

	県外転入	県外転出	転出超過
18歳	306	898	△592
19歳	475	1, 139	△664
20歳	420	688	△268
21歳	388	755	△367
22歳	654	1, 133	△479
23歳	781	1, 303	△522
24歳	626	804	△178
計	3, 650	6, 720	△3, 070

18~24歳の転出超過は3.070人となっており、高校や大学等の卒業や就職を迎える若者の転出超過が多く、県人口減少の大きな要因になっています。下の図からもその様子をはっきりと見てとることができます。

○図 年齢別県外転入・転出者数



資料3 山形県の高校卒業者の県外への進学就職状況 <出典 山形県統計企画課>

-		卒業者数	大学等進学者	就職者数	計	県外の
			数 (うち県外)	(うち県外)	(うち県外)	割合
	2015年度	10,632 名	4,794名	3,493 名	8,287 名	39.3%
	(平成 27 年度)		(3,492 名)	(691名)	(4,183名)	
	2016年度	10,204名	4,577名	3,038名	7,615名	39.0%
	(平成 28 年度)		(3,291名)	(686名)	(3,977名)	

高校卒業者のおよそ4割が進学就職で県外に出ていきます。

人口減少の一因である「若者流出」の状況を統計データで見てきましたが、これに歯止め をかけるさまざまな対策が講じられています。 最後に、それらの取組を紹介しましょう。

資料 4 若者定着・若者回帰に向けた県内の諸取組の紹介

事例1 山形県と首都圏大学との UI ターン就職促進協定 14 大学と協定を結ぶ 山形県では、山形県内の企業情報等の提供、大学内での就職ガイダンスの開催等 について、大学等と連携して取り組むことにより、Uターン・I ターン就職の一 層の促進をはかり、県内企業の人材を確保することを目的として実施している。 〈協定締結大学〉 東海大学、神奈川大学、専修大学、大東文化大学、日本大学、 明治大学、国士舘大学、駒澤大学、東洋大学、文教大学、立教大学、帝京大学、 帝京大学短期大学、明治学院大学 〈出典 山形県雇用対策課〉

事例 2 山形県若者定着奨学金返還支援事業の実施

大学等へ在学の方又は進学予定の方を対象として、県と県内市町村が連携して、 奨学金の返還を支援する事業。米沢有為会も市町村枠で実施。平成27年度から平成31年度までの5か年事業(現時点で)。要件は日本学生支援機構の第一種奨学金(無利子)の貸与を受けている方又は受ける予定の方、米沢有為会の奨学生。 大学等を卒業後6か月以内に、山形県内に居住かつ就業し、その後3年間継続する見込みの方

事例3 山形大学工学部保護者対象の米沢地域産業見学会の実施

米沢商工会議所主催。保護者の方に米沢の産業・企業を知ってもらい、この地で生活する不安を払拭してもらうことによって大学卒業後地元に残り就職する選択を後押ししてもらうことを意図した企画。昨年度は17名参加。今年度は山形大学工学部・米沢栄養大学・米沢女子短期大学の3大学に対象拡大して実施予定。

- **事例 4** 各高等学校において地域学習の展開、職場見学・体験、インターンシップの実施など郷土愛を育むとともに、社会的自立に向けた勤労観・職業観の育成を目指した多様な特色ある取組が行われている。
- 事例5 高校生就職希望者や就職者に対する地元への人材確保・定着の諸取組 置賜地区雇用対策協議会(二市二町(米沢市・南陽市・高畠町・川西町)の行政 機関や諸団体・ハローワークとの緊密な連携のもとに、若年労働力の安定確保を 目指す団体)が、模擬面接会や新入社員フォローアップセミナー、新規学卒者ビ ジネスマナー講習会等の諸事業を実施。人材確保・定着に結びついている。